

## カタクリの花は教える

富田 惣七

野末に咲く花はなおさら、山に咲く花も、庭さきの花も、それを見て不快に思うものはない。

私は、あのらんまんと咲きほこる桜の花はあまり好きではないけれども、しかしそれも、ただ花の中ではというだけの事で、勿論みていて気持のわるかろう筈はない。

人によって、この花がいい、あれはどうも、ということはある。しかし誰も花を憎むものはない。

人はみな花をきれいだと思い、そしてすきずきに花を愛し、えがき、歌に詠む。歌によむだけではない。花言葉をつくってみたり、窓の鉢に飾ったり、胸にさしたりする。造花にしてまで胸のしるしにするのである。

だが考えてみれば、花は人間のために咲くのではないのだ。人間を楽しませるためにそこに在るのではない。

花はその草にとって、その樹にとって、自分の生命に関係のあるもの、というだけのものだ。種の保存のために、虫や鳥等の眼や触覚などを刺戟するためにあるだけのものだ。

そして獣や鳥や虫にとってもそれは、おそらくは美しいと感じるものではなくて、それぞれの生命に何らかのかかわりあいがあるか、或いは余りかかわりあいがいないか、というだけのものであろう。

それなのに人間だけは、自分のためにあるのではないそういう花を美しいと思い、こよなく愛す。花をみてきれいだと感じるのは人間だけではあるまいか。

しかも、それぞれに花は、すべて違った形や色合いをもっているのに、みなそれぞれに人間は、それらをすべて美しいとするのである。

それにしても、花はすこし美しくすぎるのではないだろうか。

人間の足跡を知らないブラジルの原始林の中に、何故レリアのあの巨大で颯々たる風姿をみるのであろうか。

彼女は、誰に見せるために、かくも美しくわが身を飾っているのであろうか。

美しさを感じることを知らない獣や鳥や虫にだけ囲まれていのに、何故かくも匂やかに咲き競うのであろうか。

花自らも知らず、獣も虫も感じることもないそれほどの美しさを、人の眼のとどかない密林の奥

に、どうしてつくり出したりするのであろうか。

これはまことに神秘的なことだ。自分自身の美しさを知らない花が、変幻自在に地球の上にその美しさをばらまく事はふしぎなことだ。

人類の美の感覚や意識の以前に、すでに花はけんらんと咲きみだれ、蝶の翅は太陽に輝いていた。とすれば、そのけんらんさや輝きは、人間及人間の感覚とは本来何の関係もないのだ。

何もその美しさを感じず、ただ人間のみがそれを知るというのに、この二つのもの間には何の脈らくもないのだ。

そこには、そうであるために数えあげるべき条件や原因などは何もないのだ。このような人間と花や蝶の翅との関係も、まことに神秘といわねばならない。

花の、それほどまでに美しくあらねばならない特別な意味を発見することはむづかしい。それほどまでに多様で、しかもそのいづれもが完ペキな美を創造しているという事のわけを説明することは困難である。

そしてまた私は思う。今日の科学は、あまりにふしぎさを解明しようとする心を持ちすぎてはいないか、と。

そうではなくて、それは、もっとふしぎな、不可解な、永遠の謎となるべきものを見つけ出そうとする欲望の科学となるべきではなかろうかと。

何故ならば、永遠に謎となるべきものがこの地球上に満ち溢れているのだと人が感じたとき、人間は初めて、今日のこの混迷と矛盾と殺りくの悲劇から這い出すことができるのではなかろうか。

福井高等学校講師